学生生活チェックカタログを用いた学生生活の実態調査

ー介護福祉学科学生の結果ー

大高　恵美[1)]　小坂　信子[1)]　原田　慶子[1)]　藤沢　緑子[1)]
岩谷　隆博[1)]　磯崎富美子[1)]　重川　敬三[1)]

The Actual State Investigation of the Student Life Analyzed by Catalog of Quality of Student Life

– The Response of the Care and Welfare Students –

Emi OHTAKA　Nobuko KOSAKA　Keiko HARADA　Noriko FUJISAWA
Takahiro IWAYA　Fumiko ISOZAKI　Keizou SIGEKAWA

要旨：本研究は、学生の学習や日常生活の支援の方向性を検討するために、九州大学健康科学センターの峰松らが作成した「学生生活チェックカタログ（ver. 3）」を使用し、介護福祉学科学生の学生生活の実態を調査した。その結果、以下のことが明らかになった。

1．ＱＯＳＬ合計得点と満足度得点は正の相関があり、学年が進むにつれ、得点が増加する傾向がみられた。
2．ＱＯＳＬ各領域の平均値では、「社会的関係」「未来的展望」において、２年生が１年生より有意に高かった。（$p<.05$）
3．１年生に対する修学相談・進路に関する情報提供等の必要性が示唆された。

キーワード：介護福祉学科学生、学生生活、学生生活の質、満足度

Summary : This research investigated the actual condition of the student life of the Care and Welfare students. Catalog of Quality of Student Life (version 3) which was invented and developed by Professor Minematsu from the Health Science Center at Kyushu University was used. The following points were revealed.

There was a positive correlation between the QOSL score in total and the satisfaction score. As the students get older, the score was also increased.

Average QOSL score in items such as “Social Relationship” or “Future Prospect” was higher among the 2nd year students compared to that of the 1st year students.

It was revealed that information about the course and the job opportunities after graduation should be given fully to the 1st year students.

Key words : the Care and Welfare students, student life, quality of student life, satisfaction

---

1）学生部
本研究は、平成14年度日本赤十字秋田短期大学共同研究費助成によるものである。

はじめに

大学や短期大学の平成13年度の進学率は48.6%となり[1]、入学してくる学生の資質や能力、知識、興味、関心などは多様化している。しかし、一方では、現代の大学生の社会生活の実体験不足・生活力の低下やコミュニケーション能力の低下が指摘されている[2]。大学はこのような学生が豊かなキャンパスライフを送ることができるように細やかな教育・指導が求められている[3]。

大学が学生のサポートを行うためには、学生の現状を理解することが必要である。本学ではこれまで、独自の質問表を用いて調査を行い、学生の実態を把握することに努めてきた。

今回、九州大学健康科学センターの峰松ら[4]が、作成した大学生活の質をＱＯＳＬ（Quality of student Life）という視点からとらえ、学生像を包括的に把握する「学生生活チェックカタログ（ver.３）」を用いて、本学学生351名（介護福祉学科107名、看護学科244名）を対象に調査を行った。これまでに、「学生生活チェックカタログ（ver.３）」を用いた看護系や福祉系短期大学の調査報告はみられなかった。

ここでは、介護福祉学科学生（以下、本学学生とする）の結果について報告する。

Ⅰ．研究目的

本学学生の学習や日常生活の支援の方向性を検討するために、学生生活の実態を把握する。

Ⅱ．研究方法

１．対象:介護福祉学科107名（１年生51名、２年生56名）

２．調査方法：質問紙法。峰松ら[4]が作成した「学生生活チェックカタログ（ver.３）」を使用した。この調査用紙は、大学生のＱＯＳＬを「心身の一般的不調（18項目）」「学業・知的成長（17項目）」「生活・経済環境（15項目）」「大学内環境（15項目）」「社会的関係（20項目）」「自己効力感（15項目）」「未来的展望（15項目）」「全体的充実感（5項目）」の領域からとらえている。また、各領域の最後に満足感項目を配置し、「全体的充実感（５項目）」と合わせて12項目で満足度を測定できるように構成されている。回答は、はい－いいえの二件法で求めた。

３．調査期間：平成14年７月15日－同年７月19日

４．分析方法：データ入力時、逆転項目の得点を反転させ、得点が高いほどＱＯＳＬが高くなるようにデータ化を行い、ＱＯＳＬ得点と満足度得点は単純集計した。データ分析時はパソコン用統計ソフトＳＰＳＳ（11.0Ｊ）を使用した。また、学年間における比較はｔ検定を行った。

５．倫理的配慮：学生に調査の目的、データは統計的処理を行い個人情報が明らかになることはないこと、成績等に関係しないこと、無記名であることを説明し了解が得られた学生を対象に調査を行った。回収にあたっては、学生が自由意志で答えることができるように配慮し、回収箱を３日間設置した。

Ⅲ．結果

回収率は86名（79.63%）で、回答に欠損値がなかった82名（有効回答率95.35%）のデータを分析対象とした。回答者の背景は１年生49名（96.08%）、２年生33名（58.93%）である。

１．ＱＯＳＬ合計得点と満足度得点

全体のＱＯＳＬ合計得点の平均値は80.79±15.15、満足度得点の平均値は7.54±2.91であった。

学年間で、有意差はみられなかったが、学年が進むにつれ、ＱＯＳＬ合計得点と満足度得点は共に増加する傾向が見られた。

ＱＯＳＬ合計得点と満足度得点についてピアソンの相関係数を求めた結果、r=0.767（p<.01）で有意な正の相関があった。（表１）

表１　学年別のＱＯＳＬ得点と満足度得点

学年		ＱＯＳＬ合計	満足感
１年	平均値	78.8	7.33
	度数	49	49
	標準偏差	15.14	3.15
２年	平均値	83.79	7.88
	度数	33	33
	標準偏差	14.44	2.51
全体	平均値	80.79	7.54
	度数	82	82
	標準偏差	15.15	2.91

２．ＱＯＳＬ各領域の平均値

全体のＱＯＳＬ各領域の平均値は、「心身の一般的不調」13.24±3.28、「学業・知的成長」10.72±3.36、「生活・経済環境」8.50±2.38、「大学内環境」13.56±3.94、「社会的関係」13.56±

表２　学年別のＱＯＳＬ各領域の平均値

学年		心身の一般的不調	学業・知的成長	生活・経済環境	大学内環境	社会的関係	自己効力感	未来的展望	全体的充実感
１年	平均値	12.84	10.61	8.12	14.02	13.53	7.63	9.22	2.82
	標準偏差	3.57	3.59	2.28	3.63	3.29 *	3.68	2.45 *	1.69
２年	平均値	13.85	10.88	9.06	12.88	15.12	8.73	10.48	2.79
	標準偏差	2.72	3.04	2.46	4.32	2.98	2.98	3.13	1.56
合計	平均値	13.24	10.72	8.50	13.56	14.17	8.07	9.73	2.80
	標準偏差	3.28	3.36	2.38	3.94	3.25	3.44	2.80	1.63

＊（p<.05）

3.25、「自己効力感」8.07±3.44、「未来的展望」9.73±2.80、「全体的充実」2.80±1.63であった。学年間では、「社会的関係」「未来的展望」で、２年生が１年生より有意に高かった。（p<.05）（表２）

３．ＱＯＳＬ各領域の具体的内容

１）心身の一般的不調について

両学年に共通していることは「食事はおいしく食べられる」「からだの調子はよい」に『はい』と答えた学生は70％以上であった。また、「持病があって生活に支障がある」「風邪をひきやすく困っている」「頭痛がひどく困っている」「「アレルギーの病気（鼻炎・アトピー・喘息など）で困っている」「いつも憂うつである。」「いつも何かに追い立てられているような気がする」「いつも孤独な感じがする」「いつもイライラしている」に『いいえ』と答えた学生は70％以上であった。

１年生の特徴として、「いつも疲れている」「朝起きるのがとてもつらい」「日中眠くてしかたがないことが多い」「何となく不安になることが多い」「一つのことが気になり始めると、他のことが手につかなくなる」に『いいえ』と答えた学生は50％以下であった。（図１）

２）学業・知的成長について

両学年に共通していることは「単位は順調にとれている」「今通っている学校での勉強によって、知的に成長したと思う」に『はい』と答えた学生は70％以上であった。「難しい学習課題にぶつかるとすぐにあきらめる」「授業は欠席がちである」に『いいえ』と答えた学生は70％以上であった。しかし、「新しい知識を増やすために、よく本を読んでいる」に『はい』と答えた１年生は14.3％、２年生は27.3％と他の項目に比べ著しく低かった。

１年生の特徴として、「少なくとも２，３の授業に意欲的にでている」「授業でああ、そうだったのかという新鮮な体験をよくする」「友人と協力して勉強することがある」「周囲の物事によく疑問や関心を持つ」に『はい』と答えた学生は70％以上であった。しかしながら、「授業内容があまり理解できない」に『いいえ』と答えた学生は44.9％であった。（図２）

３）生活・経済環境について

両学年に共通していることは「学資を得るためにアルバイトに追われている」「通学や住居周辺の安全に不安がある」「通学に時間がかかりすぎて自分の時間がもてない」「研究や勉学が忙しくて、息抜きする時間がとれない」に『いいえ』と答えた学生は70％以上であった。「学外の勉強会に参加している」「習い事（英会話・華道・エアロビクスなど）をしている」に『はい』と答えた学生は両学年とも10％以下で他の項目に比べ著しく低かった。また、「情報を手に入れるためにコンピュータを自由に使える環境にある」に『はい』と答えた１年生は20.4％、２年生は33.3％であった。（図３）

４）大学内環境について

両学年に共通していることは「学校の洗面所（トイレ）に不満がある」「学内の安全に不安がある」「転校（転学部・転学科を含む）を考えている」に『いいえ』と答えた学生は70％以上であった。「自分の学校を誇りに思っている」に『はい』と答えた学生は70％以上であった。また、「困った時に健康保健管理センター（保健室）・学生相談室等を利用できる」に『はい』と答えた１年生は20.4％、２年生は12.1％と他の項目に比べ両学年とも著しく低かった。（図４）

５）社会的関係について

両学年に共通していることは「いろいろなことを話せる友達がいる」「悩みを相談できる人がいる」「学外での生活を楽しめる」「休日を楽しめる」「運動やスポーツなどを友人とすることが好きである」「人と食事を楽しく食べられる」に『はい』と答えた学生は70％以上であった。「履修のしかたがわからない時に尋ねる友人がいない」「学校の中で誰とも話さずに帰ることが多い」に『いいえ』と答えた学生は70％以上であった。しかし、「人が自分の事をどう見ているかとても気になる」に『いいえ』と答えた１年生は22.5％、２年生は30.3％で両学年とも低かった。

この領域は、学年間に有意差があり、特に「初対面の人と話をするのが苦にならない」「人間関係に満足している」「人間関係が不器用である」において、２年生が１年生よりも有意に高かった（$p<.05$）。（図５）

６）自己効力感について

両学年に共通していることは「これからの人生で何か意味のあることができると思う」「困難な出来事にぶつかっても、どうにかできると思えることが多い」に『はい』と答えた学生は70％以上であった。しかし、「自分の能力が発揮できている」に『はい』と答えた１年生は16.3％、２年生は24.2％と他の項目に比べ両学年とも著しく低かった。また、「何をするにもうまくいかないのではないかと不安がある」に『いいえ』と答えた１年生は32.7％、２年生は45.5％であった。（図６）

７）未来的展望について

両学年に共通していることは「将来どんな職業につくのか、ある程度の方向をきめている」「今は苦労していることでも、これからの人生で何か役に立つと思う」「自分の将来は自分で切り開いていけると思う」「この学校での経験は将来のためになると思う」に『はい』と答えた学生は70％以上であった。「自分が将来就きたい職業について全く考えられない」「卒業後、定職に就きたくない」に『いいえ』と答えた学生は70％以上であった。

この領域は学年間に有意差があり、特に「将来のために、自主的に授業以外の勉強もしている」「将来の職業のための準備（資格の勉強や職業の情報収集など）をしている」の項目において、２年生が１年生よりも有意に高かった（$p<.05$）。（図７）

８）全体的充実感について

両学年ともに「夢中になってできるような好きなことがある」「学校生活に満足している」に『はい』、「毎日意味もなく生活が過ぎていくような気がする」に『いいえ』と答えた割合はほぼ同じであった。（図８）

Ⅳ．考察

１．本学学生のＱＯＳＬの特徴について

本学学生の全体のＱＯＳＬ合計得点の平均値は、同じ調査用紙を用いて四年制大学、短大、高専、専門学校を調査した福盛らの報告[5]の短大とほぼ同様の結果であった。しかし、全体の満足度得点の平均値は、福盛らの報告にある各学校よりも本学は高かった。また、全体のＱＯＳＬ各領域の平均値は福盛らの報告[5]の短大と、ほぼ同様の結果であった。福盛らは短大の特徴を未来展望がはっきりとしていること、大学環境と社会関係がよいという傾向がみられる[5]と述べている。

今回の調査では、「社会的関係」「未来的展望」の領域で、２年生が１年生より有意に高かったこと、ＱＯＳＬ合計得点と満足度得点に正の相関がみられたことから、学年が進むにつれこの傾向がみられるといえる。この理由として、本学は卒業時に介護福祉士の資格取得が可能であり、卒業後の進路も資格を活かした就職や福祉系大学への編入を希望する学生が多く、学年が進むにつれ将来の方向性が明確になりやすいことが関連しているのではないかと考える。

２．ＱＯＳＬ各領域の具体的内容から学生の特徴について

ＱＯＳＬ各領域の具体的内容から学生の特徴を見ると、「心身の一般的不調」では、学業に差し障りのある心身の不調を感じている学生は両学年共に少ないが、１年生の過半数が慢性的な疲労を感じていると考えられる。要因としては授業時間が１コマ90分と高校での学習時間より長くなったことや開講科目が１年生に集中し、２年間で専門的な知識や技術を学ぶため、入学直後から専門用語が並ぶ授業が開始すること等が考えられる。

また、「学業・知的成長」では、１年生は授業や周囲の物事に対し興味や関心が高く、意欲的に学習に励んでいる傾向が見られる反面、授業内容を十分に理解できていないと感じている学生が半数を超えており、深刻に受け止めるべき課題といえる。現在、学科内でもカリキュラム編成等について検討中であるが、特に１年生の履修科目数等について検討する必要性が示唆された。

「大学内環境」では、学内の安全面や衛生面にはほぼ満足しているが、反面、教室の設備や構造には不満を感じている学生が多かった。本学は開学７年目であり衛生面では充実しているが教室内に冷房設備等を希望する学生の声が毎年、多くあることから、それらが影響している可能性があると考える。困った時に保健室や学生相談を利用できるとした学生は、両学年ともに少なく、学生が利用しやすい相談体制の充実が示唆された。

「社会的関係」では、ほぼ良好な交友関係を築いているが、その一方で、他者が自分をどう見ているか気になると感じている学生が多かった。このことは、他者の視線を意識し、表面的に円滑な関係を形成する傾向があると指摘されている現代の若者の特徴[6]が反映されているのではないかと考える。しかし、対人援助職を目指す学生としては、自分の表情や態度が相手に与える影響を意識し、配慮して人と関わっていくことが必要であるため、教師は、日常生活の場でもこれらのことを意識し、心がけるように指導している。気になると感じている学生がこの指導を真摯に受け止め、心がけている姿勢であるとすれば、対人援助職を志す者の意識としては、この数値は問題点としてのみ捉えるべきものではないと考える。この点については今後さらに調査し、明確にしていきたいと考える。また、この領域では、学年間に有意差が認められ、２年生が高かった。要因としては、２年生は長期の実習やボランティア等を通して、年齢や生活環境や価値観の異なる様々な人に対して能動的に関わる経験をし、人間関係を形成する社会的スキルの向上が考えられる。一方、１年生は本調査が入学後３ヶ月という時期に行われており、クラスメイトとの関係やその他の日常生活上の人間関係においても４月を境に変化し、十分に形成されていない学生がいることが影響しているのではないかと考える。

「自己効力感」では他領域と比べ得点が低い項目が多く、現在の自己を肯定的に捉えることができない学生が多かった。しかし、自己の可能性については肯定的に捉えている傾向が見られ、学生は自己についてアンビバレントな感情を抱いているのではないかと考えられる。

「未来的展望」では、自己の将来の方向性を決め、明確な目的意識をもって学生生活を送っていることが明らかになった。この領域では、学年間に有意差が認められ、２年生が高かった。２年生は将来への準備として、自主的に学習している状況が明らかになり、このことから２年生は将来の方向性や目的意識がより明確であるといえる。しかし、１年生の過半数は、卒業できないのではないかと不安を感じていることから、１年生に対しては、入学後一定期間おいた後に、修学相談や進路に関する情報提供などを行う必要性が示唆された。

「全体的充実感」では、やりがいあることや夢中になることを見つけ、学生生活を送っている反面、多忙な現実に流されていると感じている学生がいることが明らかになった。

Ⅴ．結論

峰松ら[4]が作成した「学生生活チェックカタログ（ver.３）」を用いた介護福祉学科学生の調査から以下のことが明らかになった。

１．ＱＯＳＬ合計得点と満足度得点は正の相関があり、学年が進むにつれ、得点が増加する傾向がみられた。

２．ＱＯＳＬ各領域の平均値では、「社会的関係」「未来的展望」において、２年生が１年生より有意に高かった。($p<.05$)

３．１年生に対する修学相談・進路に関する情報提供等の必要性が示唆された。

おわりに

本研究の限界は、１施設の調査であるため一般化に限界があること、同じ調査用紙を用いた報告が少なく、比較検討が十分にできなかったことである。また、この調査用紙は学生自身に自己の生活について気づきを促す機能を持っているため、今後はその機能を活用した調査を行い、学生の変化を捉え、学生生活の支援のあり方を検討していきたいと考える。

今回の調査にご協力くださいました本学学生の皆様に心より、お礼申し上げます。

引用文献

1）文部科学省：2002年度学校基本調査速報

2）福盛英明他：大学生のＱＯＬの研究(2)　簡易版「大学生活チェックカタログ45」の開発と実施，大学生の生活の質（Quality of student Life）に関する研究－「大学生活調査カタログ」の開発－報告集，p13，2002

3）文部科学省：大学における学生生活における学生生活の充実方策について（報告）－学生の立場に立った大学作りを目指して－，大学と学生，472号，p19，2000

4）峰松修他：大学生の生活の質（Quality of student Life）に関する研究－「大学生活調査カタログ」の開発-報告集，pp.45-47，2002

5）福盛英明他:学生のＱＯＳＬの横断的研究－大学・短大・高専・専門学校の比較検討－，大学生の生活の質（Quality of student Life）に関する研究－「大学生活調査カタログ」の開発-報告集，pp.35-36，2002

6）岡田努：友人関係の現代特徴と適応感及び自己像・友人像の関連についての発達的研究，金沢大学文学部論集，22，ｐ１，2002

参考文献

峰松修編：大学生のこころの風景,こころの科学，69号，pp.13-85，日本評論社，1996

渋谷正子，高橋美岐子，佐藤沙織：本学介護福祉学科卒業生の意識調査，日本赤十字秋田短期大学紀要５，pp.39-42，2000

立山正子，高橋美岐子，宮堀真澄他：日本赤十字秋田短期大学介護福祉学科新入生の意向調査（Ｉ），日本赤十字秋田短期大学紀要１，pp.31-41，1996

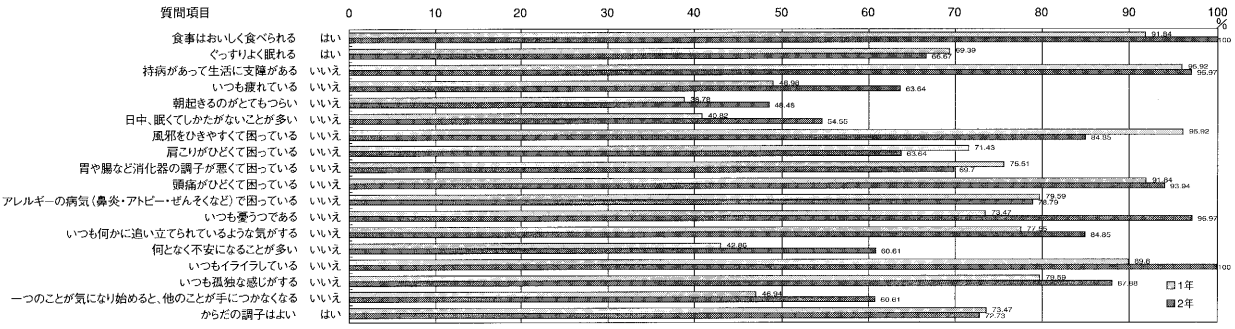

図１　心身の一般的不調

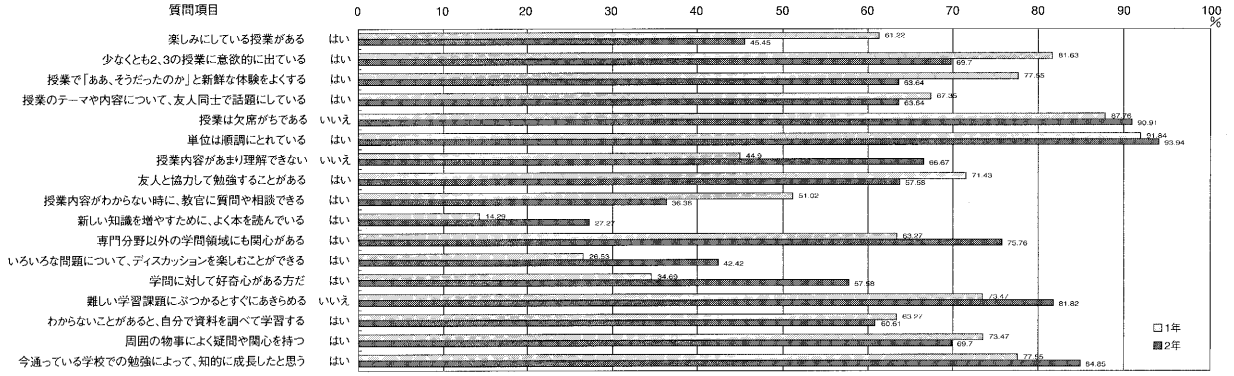

図２　学業・知的成長

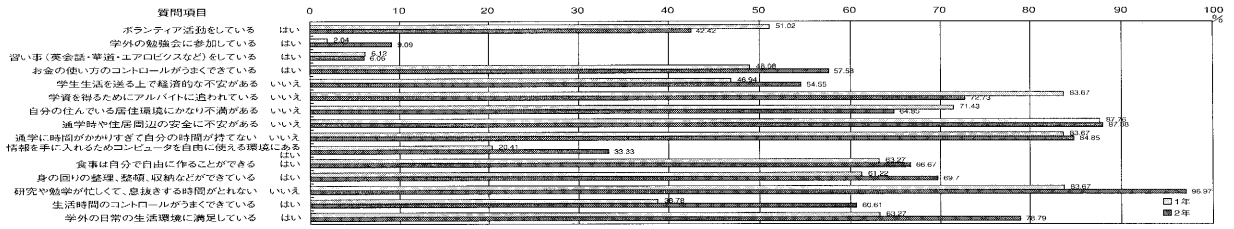

図３　生活・経済環境

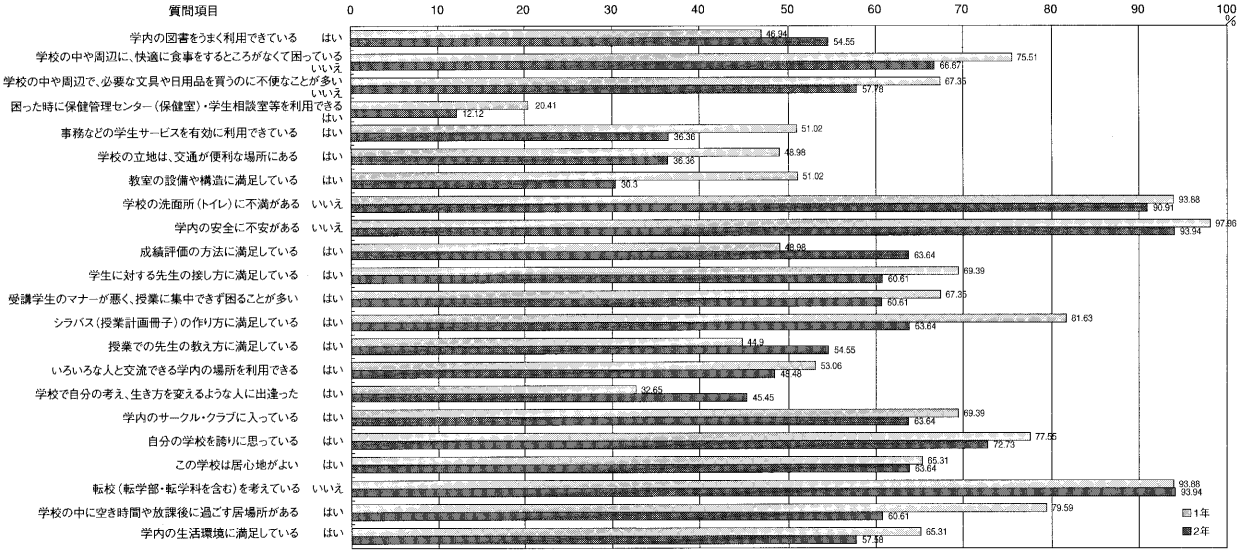

図４　大学内環境

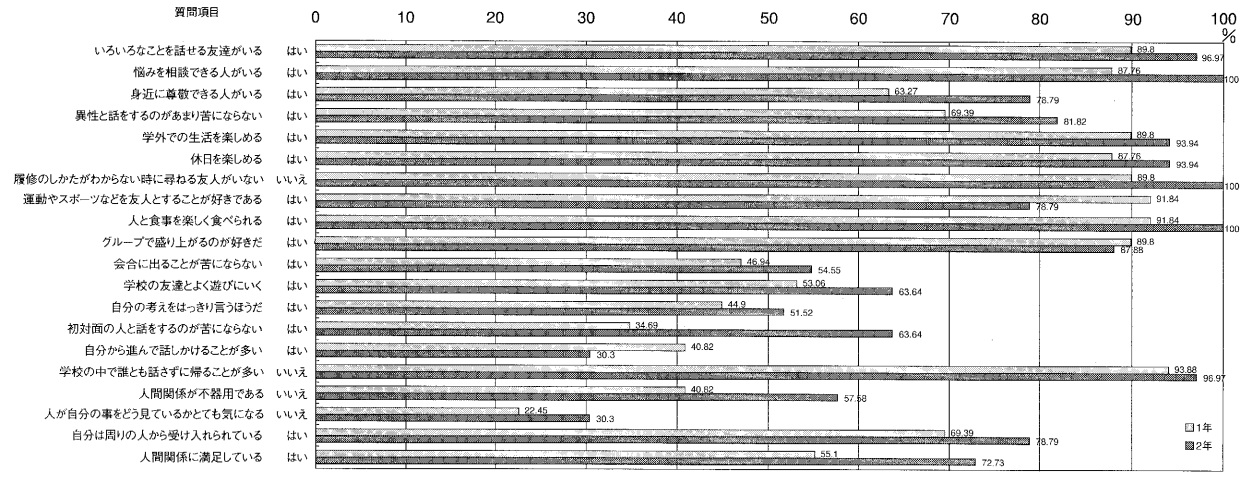

図５　社会的関係

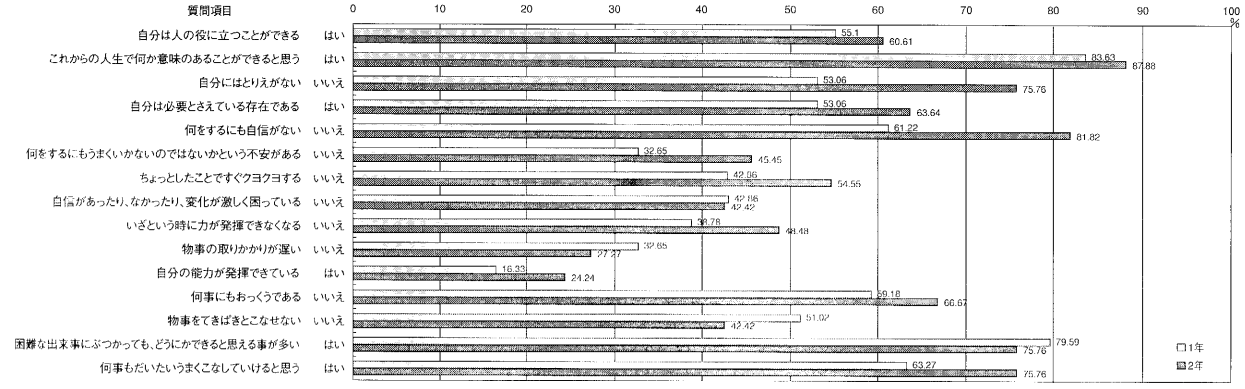

図６　自己効力感

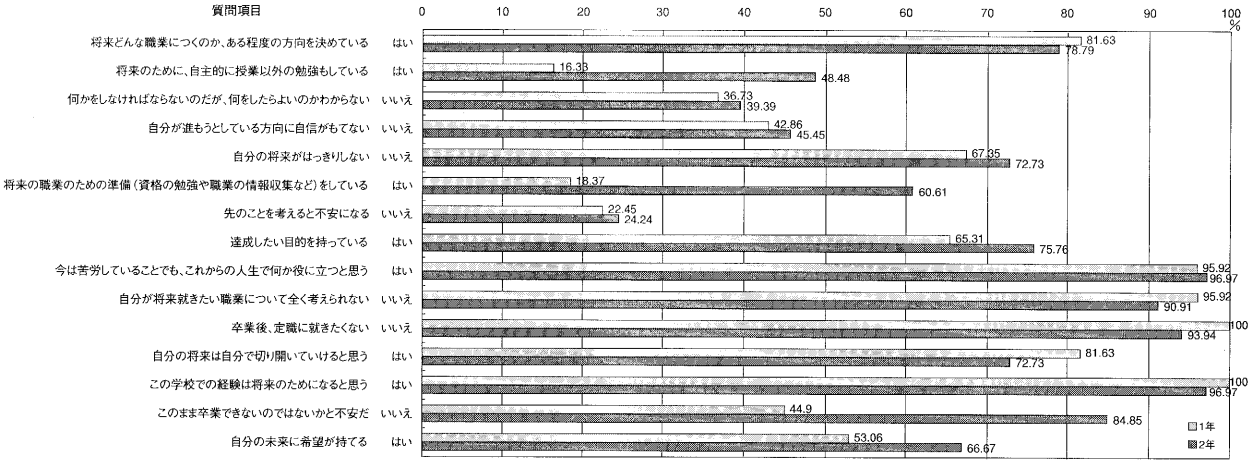

図７　未来的展望

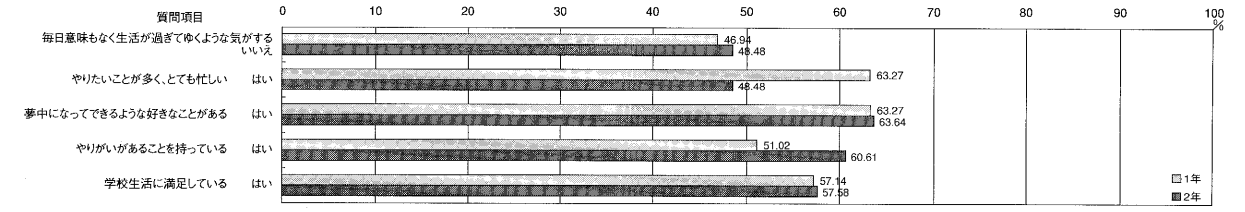

図８　全体的充実感